

南山城地域の弥生高地性集落についての一試考

伊賀 高弘

1. はじめに

平成9年、京都盆地の南縁の丘陵上に分布する中世の木津城跡の発掘調査が財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによって実施された。調査の目的は、通称「城山」と称される標高100m余りの山頂部分に良好に残されていた方形単郭式の城郭遺構の周囲への展開を確認することにあつた。

調査は、その主郭が営まれた丘陵のピークにあたる「城山」(標高106m)から南北に展開する主尾根部分と、そこから西方の平野側に分岐する支脈のそれぞれ脊梁部において試掘トレンチを配して、遺構の有無の確認を行った。調査の結果は意外な展開を示した。予想していた中世の遺構・遺物は全く検出されなかったのに対し、弥生時代の遺構・遺物が各所において広域に存在するという結果を得たのである。ここに至って、その実態が、主として立地環境から弥生時代後期に機能した、いわゆる「高地性集落」であることが容易に判断されたことから、この遺跡を「木津城跡」と区別するために新たに「木津城山遺跡」と命名した。^(注1)

この「木津城山遺跡」は、平地との比高約60mを測る丘陵上に展開するが、京都盆地に面する、その縁辺に位置するため、眼下に木津川の流域の平野を望み、山城盆地のほぼ全域を望見できるだけでなく、目を転ずれば大和地域(主としてその西縁部)も展望可能な立地条件を示す。まさに高地性集落が有する監視・哨戒・通報・防塞という主要な側面を備えている。ところで、都出比呂志氏は高地性集落の持つ通信施設の側面を重視し、高地性集落間における後の「縋燧」の制に結びつく狼煙によるネットワークを強調した。^(注2)ただ、氏の考察の中で木津城山遺跡は未だ確認されておらず、大阪湾を起点とする淀川・木津川水系を遡上する狼煙のネットワークの経路に同遺跡が入っていないため、山城南部から大和盆地内の伝達が十分に考慮されていなかった。

そういう意味で、木津城山遺跡の占める役割は重要で、今後両地域間の情報伝達の機能を考える上で重要な遺跡として認識されることであろう。

以下、木津城山遺跡について、これまでの調査成果を基に論究していくが、その前に山

城地方でこれまで確認されている高地性集落について概観し、木津城山遺跡と比較検討してみよう。

2. 山城地域の高地性集落の現状と研究成果

ここでいう山城地域とは淀川・桂川・宇治川・木津川の主要河川とその支流の沖積作用によって形成された京都盆地とその縁辺に帯状に分布する洪積丘陵を含む地域であり、同じ淀川流域にある現在の行政区分上の大阪府内は扱わない。この地域の高地性集落の解釈については、これまでに都出氏を始めとする諸氏によって紹介されているが、その後、新たな遺跡が発見されるケースもあるため、ここでは改めて各遺跡についてその内容を概説してみたい。なお、出土土器の年代観については、森岡秀人氏の山城地域の編年案により導き出された時期区分^(注3)を使用する。

北山遺跡(第1図12) 向日丘陵上に立地する元稻荷古墳の調査の際に発見された遺跡である。標高約55m、平野部との比高約40mを測る南北に延びる低丘陵の南端付近に位置する。元稻荷古墳の墳丘盛土内から弥生期の土器や石器が発見され、さらに墳丘盛土直下に遺物包含層が確認されたことから、その存在が明らかになった。古墳の周囲にある程度の平坦面が広がっていることから、一定の集落の拡がり^(注4)が想定される。

谷山遺跡(第1図11) 西山山地から東方に派生する支脈の最東端の東側斜面(標高71～76m)に展開する。平成元年度の調査では、竪穴式住居跡は6基が同時存在で、おおむね環状に配置されており、ほとんどの住居が焼失している。弥生V期中頃の多くの土器とともに当該期において畿内では出土例が極めて少ない板状鉄斧・鉄製鍬(鋤)が出土していることは注意を要する^(注5)。

幣原遺跡(第1図9) 男山丘陵から派生する支丘陵の稜線上で、分布調査の折、発見された。標高50～60mを測るが、現在の幣原集落との比高は15～20mにとどまり、河内・山城両方向ともに視界はあまりよくない。一部発掘調査が実施されており、丘陵斜面を敷地とするテラス状の住居跡が2基検出されている。平面プランは円形と方形で、後者は小規模な段状遺構を伴う。出土遺物として手焙形土器などの土器類や石器が出土しており、それらが示す時期は弥生V期後半(V-3・4期)を中心とするものである^(注6)。

羽戸山遺跡(第1図18) 標高347mの五雲峰の西斜面の縁辺部に形成された独立丘陵上に遺跡は立地している。遺構が検出された地点の標高は約70mで、宇治川沖積地との比高は約40mを測る。トレンチ調査のため全貌は明らかでないが、弥生時代に属する遺構として正方形プランの竪穴式住居跡1基、土壙墓かと思われる土坑38基、何らかの祭祀に利用されたと評価されたテラス状遺構等が検出されている。主として後者から完形に近い土器

類が出土しており、それらが示す年代はV期の前半代(V-1・2期)^(注7)である。

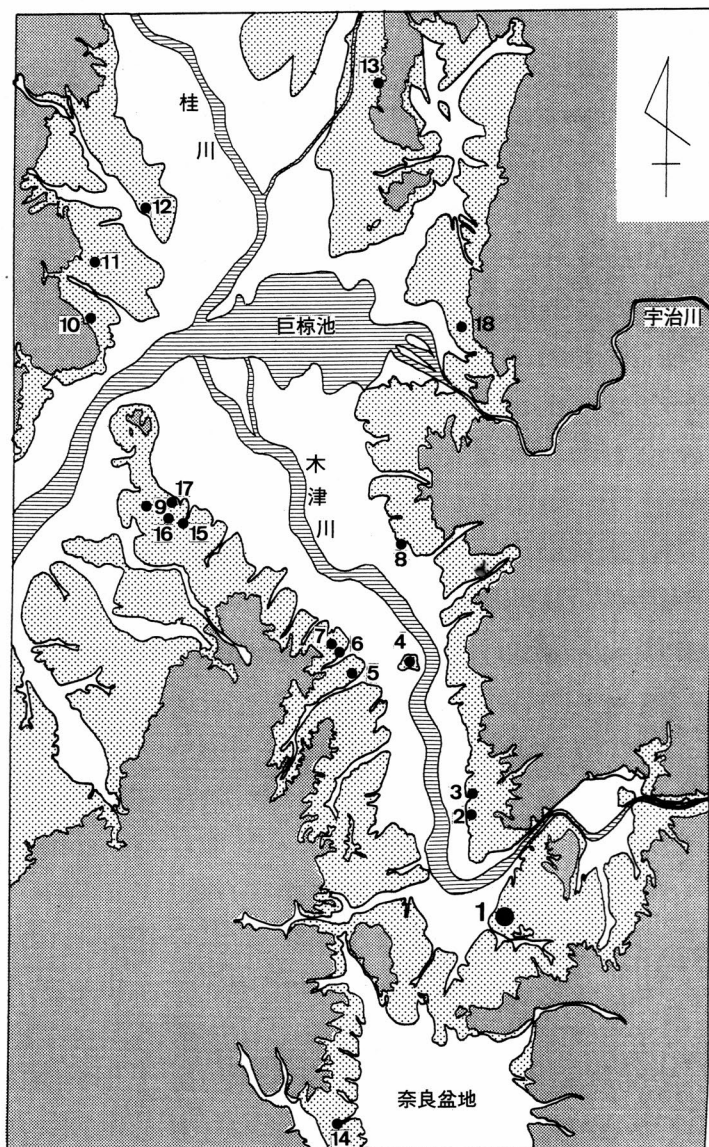
興戸遺跡(第1図6)

田辺中学校の背後の独立丘陵の山頂部に所在する興戸1号墳の調査の際、墳丘盛土下層から弥生時代の竪穴式住居跡の一部が検出された。また、墳丘盛土中にも弥生土器が包含されており、古墳築造の際、弥生時代の遺構を削平していることがうかがえる。調査は鉄塔建替を原因とするため狭い範囲に限定されるが、丘陵上の平坦面はそれほど広くなく、集落が存在するとしても小規模なものであろう。住居の床面の標高は約87mで、周囲は急峻な斜面となり、木津川沖積地との比高差は約60mと大きい。^(注8)

田辺遺跡(第1図7)

上記の興戸遺跡住居

確認地点から北西方向に直線距離にしてわずか400mと隣接する、南北に主軸を持つ丘陵上に位置する(標高約82m)。この地区には周知の遺跡として田辺城跡が分布するが、調査の



第1図 高地性集落分布図(S=1/160,000)

- | | | |
|-------------|-----------|-----------|
| 1. 木津城山遺跡 | 2. 椿井遺跡 | 3. 平尾城山遺跡 |
| 4. 飯岡遺跡 | 5. 天神山遺跡 | 6. 興戸遺跡 |
| 7. 田辺遺跡 | 8. 森山遺跡 | 9. 幣原遺跡 |
| 10. 鳥居前古墳下層 | 11. 谷山遺跡 | 12. 北山遺跡 |
| 13. 南日吉町遺跡 | 14. 六条山遺跡 | 15. 宮ノ背遺跡 |
| 16. 備前遺跡 | 17. 南山遺跡 | 18. 羽戸山遺跡 |

結果、城郭遺構の下層から弥生時代の遺構・遺物が検出された。その内容は、方形台状墓1基、土器棺墓1基、円形プランの竪穴式住居跡3基等である。確認された住居跡は径10m前後とやや規模が大きく、中央炉から直線的な溝が屋外に延びる共通点が見られる。帰属時期は出土遺物(土器・石器)の特徴からⅣ期～Ⅴ期前半と報告されている。なお、調査区の北端の北側に下る斜面地で、等高線と平行する方向に主軸を置く幅約7.0m・深さ約4.5mを測る規模の大きな「V」字セクションの溝が検出されている。中世の薬研堀を想定しているが、出土遺物が貧少で、弥生時代の環濠の可能性も残している^(注9)。

宮ノ背遺跡(第1図15) 南北方向に延びる丘陵の先端部に位置する。丘陵頂部には一定の平坦面(標高約40m)が形成されており、この地区において弥生時代の遺構が検出された。主な遺構は竪穴式住居跡8基(円形3、方形5)で、Ⅴ期の中～後葉の土器資料を伴う。住居跡の中には管玉を伴い、焼却処分されたものや、平根腸挟式鉄鏃が出土する住居がある^(注10)。

備前遺跡(第1図16) 宮ノ背遺跡の西方約500mに所在する洞ヶ峠を臨む丘陵に営まれた遺跡である。調査は標高約60mを測る斜面地で実施され、テラス状住居5基、等高線と平行する溝(環濠)1条等が検出された。住居プランは円形と方形があり、土器類とともに鉄鉞・石戈等も出土している。環濠は斜面の下位部に犬走り状の平坦面を造り出し、そこに土塁と柵列を設けるといふ防御性の高い構造を示す。濠内からは完形率の高い土器資料が一括投棄された状態で出土し、これに混じって桃核、石剣、土錘などが共伴する。時期はⅤ期初頭もみられるが、主体はⅤ期中葉を中心とするものである^(注11)。

南山遺跡(第1図17) 男山の南に続く標高35～40mの丘陵の東斜面に立地する。これまでの調査で竪穴式住居跡が24基密集するように確認されている。住居の平面形は円形・五角形・方形が認められ、覆土に炭化材や焼土を含む消失住居も存在する。集落の機能時期は出土土器から弥生Ⅴ期後半が中心で、一部弥生Ⅵ期(庄内併行期)のものも含まれる^(注12)。

天神山遺跡(第1図5) 北西から南東方向に延びる丘陵支脈の尾根の先端部におよそ60×45mの範囲にわたって平坦面が形成されており、この地点にて集落関連遺構が検出された。遺跡が立地する地区の標高は78～82mで、東方の眼下に展開する木津川沖積地との比高約50mを測る。検出された主な遺構は竪穴式住居跡と貯蔵穴、建物にまもらない柱穴群等で、前者は23基相当確認された。これらの住居は、中央に柱穴群を配した空閑地の周囲におおむね環状に配されており、多くが同じ位置で複数回の建替えられた形跡を残す。住居の平面プランは円形と方形があり、時期的には前者から後者への変遷が認められる。出土遺物として多量の土器類に混じって、金属器(半球形青銅器＝銅釘・鉄鏃先状鉄器・鉄鏃・斧状鉄器・鉄刀子)や石器(石鏃・砥石)の出土が目立つ点は注意すべきである。土器の示す年代観はおおよそ弥生Ⅴ期の後半を示す^(注13)。

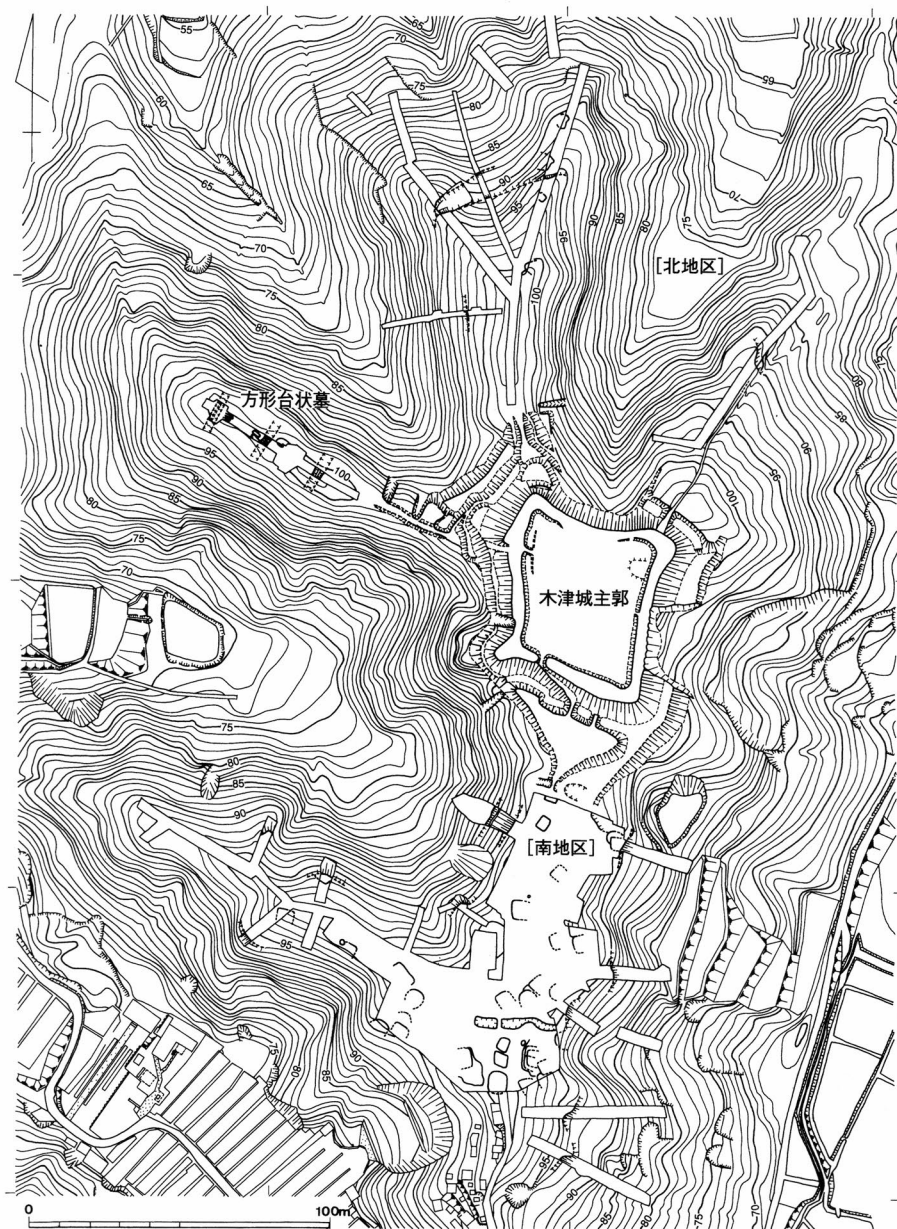
飯岡遺跡(第1図4) 木津川沖積低地の中央に存在する周囲約2kmの独立丘陵(最高所の標高67.6m、周囲との比高約40m)上に位置する。調査は局所的に実施されているにすぎないが、同丘陵の南傾斜面を中心とする一帯の各所から弥生時代の遺構が検出されている。その内容は、円形プランの竪穴式住居跡2基、方形の竪穴式住居跡1基、方形周溝墓2基、土坑、溝等で、出土遺物からいずれも弥生V期後半に造営の一点を求められる。^(注14)

椿井大塚山古墳下層(椿井遺跡)(第1図2) 椿井大塚山古墳は、その主体部から三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡36面等が発見され、小林行雄氏により同範鏡論を生んだ著名な古墳であるが、この古墳の墳丘の調査の際、その頂部と裾部の各所より弥生土器が出土した。出土量は決して多くないが、それらは弥生Ⅲ期と弥生V期後半～Ⅵ期(庄内期)に分別できる。古墳は、丘陵の縁辺部に形成された尾根の末端を截断して築造したものだが、上記の遺物は古墳が造営される以前に弥生時代の遺跡が展開していたことを示している。なお、後円部の標高は60mで、西側に広がる平野部との比高は約30mで大きくはないが、遠方への眺望は優れている。^(注15)

森山遺跡(第1図8) 木津川河谷盆地が東西に幅を広げた現在の城陽市の東部丘陵上に位置する。ただ丘陵とはいえ比較的低い洪積段丘の先端部であり、標高35～38m、丘陵裾部との比高差約15mを測るに過ぎない。宅地造成にともない面的な調査が行われ、縄文後期の集落遺構や、豪族居館との関連が指摘された方形周溝状遺構や多くの竪穴式住居跡からなる古墳時代の遺構に混じって、断片的ではあるが弥生時代の遺構が検出されている。弥生時代の遺構は方形プランを呈する一辺3m前後の竪穴式住居跡2基と土器棺1基である。住居跡は出土遺物(土器類)からV期後半に造営されたもので、この丘陵上に同期の集落が展開していることが予想される。^(注16)

3. 木津城山遺跡の調査成果

はじめにも示したように、木津城山遺跡については、平成9年度以来、現在に至るまで継続して調査を行っている。調査は、城山山塊の最高所を占める木津城の主郭部分が緑地として現状保存されるため、この城郭の主郭遺構を除くその南北両側において、主として派生する尾根筋の鞍部に調査区を設け、特に南地区においては、配水池の建設が計画されたため、丘陵頂部を中心に比較的広い範囲の調査区を配して調査を実施した。その結果、平成11年度末現在までに、弥生時代V期に属する集落関連の遺構と墳墓及び古墳時代終末期の小規模古墳を数基検出するといった成果を得ている。ここで俎上に上げる弥生期の主な遺構は、広義の竪穴式住居跡約30基、段状遺構5基、集落内を区画する溝1条、集落を圍繞する溝(環濠)あるいは切岸状にカットされた急斜面遺構、方形台状墓2基等である。



第2図 木津城山遺跡主要遺構配置図(S=1/2,500)

住居跡のうち、尾根の脊梁部で検出されたものは5基で、これらは通常の竪穴式住居の構造を採る。これに対して、その他の多くの住居跡は山腹の傾斜面を住居の敷地とするため、標高の高い側のみ、竪穴状に掘り下げ、標高の低い側には盛土を施し、水平の床面を構築する手法を採用する(テラス状住居)。もっとも、後者の盛土部分は流出してしまっており、現状ではその痕跡は残らない場合が多い。住居跡の平面プランは円形が8基、隅丸方形が

20基で、後者の割合が高い。平面プランと時期差の相関関係については、出土遺物の内容から追跡できる時期差はほとんどみられないが、同一地点で建て替えられた住居の中に、「円」から「方」への変遷をたどる例が認められる。また、平面プランと住居構造との関係では、建物敷地の勾配が強いテラス状住居ほど方形プランを指向し、緩斜面もしくは水平地盤に占地する住居に円形プランのものが多く傾向がわずかだが読み取れる。これは斜面に平面が円形の床面を造成するのが技術的にみて困難であったことに起因するのであろう。住居の平面規模については、計測できる住居跡は決して多くはないが、規模のばらつきは比較的少なく、おおむね一辺あるいは径5.0～6.0mを測り、同期の住居としては他の遺跡と比べても標準的なサイズを示す。主柱穴の配置についてはそれを明瞭に残す類例をみた場合、住居プランの相違に関係なく径20～30cmの掘り形をもつ柱穴が同一円周上に4か所以上ほぼ等間隔に配される例が卓越している(都出氏の柱穴配置の分類の「主柱穴配列求心構造」^(注17))。屋内の火処の痕跡を残す住居跡は少ないが、それが遺存する場合、多くは床面の掘り込みが浅い地床炉を想定できるが、中には床面を円筒状に深く掘り込んだ中央ピットを有する例があり、これについては都出氏のいう「灰穴炉」^(注18)の可能性を指摘できる。なお、検出された住居のうち1基のみ床面に炭化材と炭・焼土の堆積がみられ、焼失したものと考えられる。

次に、段状遺構であるが、主として南地区の山腹斜面で検出されている。その構造はテラス状住居と原理は同じで、傾斜地を等高線に沿って断面が「L」字状になるようにカットし、一定の平坦面を造り出したものである。等高線が直線的に走る地点に多くみられることから、必然的に平面が「コ」字形を呈するものが多いが、中には後世の流失を受けて不整形プランに変形しているものもある。壁下に溝を伴うものが大半で、平坦面における雨水の排水を考慮している。平坦面に住居の周壁溝が複数重複し合って存在する例があり、住居群の敷地を傾斜地に確保する施設として機能したものとみられる。

集落内区画溝は、南地区の南寄りで検出された。城山丘陵の主尾根の軸線に直交する方向(東西方向)に堀切状に掘開されたものである。尾根の稜線(中心軸線)付近では現状で幅1.6mにわたって陸橋状の掘り残し部分があり、溝中に南北方向の通路を確保している。後世の削平により旧状を失うが、逆台形セクションを呈し、復原幅3.0m以上、深さ2.0m以上の規模を有していたものとみられる。

方形台状墓は、木津城主郭から北西に派生する支脈尾根の稜線上に設けた幅2mの試掘トレンチで確認した。その状況は、直線状に延びる尾根の主軸に対して直交する方向のやや規模の大きな(検出幅約3.0m)の溝が約20mの間隔をおいて3条検出された。当初木津城主郭に至る城道を遮断する堀切と考えたが、溝内から弥生土器のみが純粹に出土する

点や、溝に挟まれた空間に埋葬施設とみられる土色の変化が複数確認されるに至って、この溝は方形台状墓の区画溝であることが判明した。つまり、2基の台状墓が中間の区画溝を共有して、尾根の脊梁部に東西に縦列配置している状況が明らかとなった。調査は、遺構の存在確認に主眼をおいたため埋葬施設等を全てにわたって完掘していないが、底部まで掘りきった東側2本の区画溝内から弥生V期前半期の土器資料が若干数得られたほか、西側の台状墓の台状部の周辺に位置する埋葬施設から獣帯鏡破鏡が1点出土した。

集落を圍繞するとみられる施設が調査区各所で断片的に確認されている。その構造は、多くの場合、山腹斜面の自然の勾配をより急角度に削り込んだもので、中世山城遺構の「切岸」と原理を同じくする。自然の斜面をほぼ急な角度で削り込むため、その下縁に一定幅のテラスが形成されているのもその特質である。中には、礫混じりの非常に硬い岩盤を削り込んでいる箇所も散見され、それが自然の開析とは考えられないとともに、加工に注ぎ込まれた労働力の大きさが想像される。今のところ、これらの切岸状遺構は、およそ標高90～100mの高さにおいて、それぞれの地点で一段分確認されており、試掘トレンチ内の検出でその一部を垣間見たに過ぎないが、おそらく複雑に曲折する自然地形が示す等高線に沿うように一重に巡らせているものと予想される。なお、最近になって、木津城主郭のすぐ南側の西斜面に設定したトレンチでは、この囲画施設が空壕構造の溝状を呈しており、斜面の下手側の立ち上がりが人為的な盛土によって造作されている様子が判明した。ほかの地区でも斜面の下縁に形成された地山のテラス上に盛土による土塁様の施設を考えられなくもないが、今は完全に流失したものか、その形跡を留めない。さらに、北地区では、これが溝状を呈して尾根筋を堀切のように横断する箇所があり、溝(壕)の上縁に沿って高杯や甕などの土器類が整然と並べられた状態で出土している。居住空間としての機能を想定できないことから、何らかの祭場的な性格を想定すべきかもしれない。

次に、出土遺物について若干言及しておきたい。これまでの調査によって出土した遺物は土器類が大半を占め、これに数点の青銅器が加わる。弥生集落として基本組成として加わる石器類は今のところ全く出土していない。また、弥生時代後期になって普遍化する鉄器類についても確認されていない。土器類は調査区の各所からやや数多く出土しているが、個別の解説については、紙幅の都合上、調査概報に譲り割愛せざるを得ないが、全体の傾向として、時期的には弥生後期の初頭を中心にその前葉の時間幅(V-1・2期)で捉えられる。また、その様相は概して大和系の土器が主流を占め、それに中河内や近江、中部瀬戸内、山陰系の土器が一定量組成する。

青銅器は鏡2点である。内1点は、上記の方形台状墓の埋葬施設内から出土した獣帯鏡破鏡である。鈕座部分の小片資料であるが、遺存状態は良好である。有節弧文を二重に

配し、その間を「U」「S」字状の渦紋を地文とする乳帯文で充填する。四神瑞獣等を表した主文部を欠くので細線式か浮彫式(半肉彫式)かにわかに判断できないが、有節重弧文の多用や扁平な渦紋の形態は同形式鏡群の新しい要素であり、A. D. 1世紀の後半に出現する浮彫式獣帯鏡にまみられる意匠と考えられている^(注19)。そして、同じ台状墓の区画溝出土土器の年代観(V-1期)が近年の研究によりA. D. 1世紀の暦年代の枠内で捉えられる以上、大陸での製作から入手、伝達、埋納までの期間が相当短かったことを想定せざるを得ない。他の1面は、竪穴式住居跡の覆土中から出土した。完形の鏡で、直径4.4cmを測る小形鏡である。鏡背に何ら文様をあしらわない点から国産のいわゆる「素文鏡」の範疇で捉えられる。同住居出土(覆土も含む)の土器資料は量的には多くないが、弥生V期の前葉(V-1・2期)を下るものはなく、これが鏡の遺棄年代を示すとみるなら、素文鏡としては国内で最も古い事例となる。

以上が木津城山遺跡についての、これまでの調査に基づいた遺構・遺物の概要である。もっとも、調査開始以来この3年間で発掘調査した面積は、南地区が比較的広いといえども、まだ全体の一部に過ぎず、居住施設空間としては最適とみられる中世木津城主郭部分が全く未調査である点も含めて、今後の調査によっては予想もしない展開がみられるかもしれない。

4. 若干の考察

以上、新発見の木津城山遺跡の実態を中心に、山城地域でこれまで確認されている高地性集落について、その事実を素描してみた。全体を通して共通して言えることは、個々の遺跡に対して実施された発掘調査はその一部分に過ぎず、いまだその全体像を明らかにしていないという点である。したがって、ここで遺跡の性格等について評価を下すには時期尚早と考えるが、こうした様々な制約の中で、現時点で考察できる事項を抽出して若干整理しておきたい。

まず第一に、遺跡の立地環境における類型である。とくに、ここでは比高差に示される遺跡の垂直的な位置関係について触れてみたい。事実報告で記したように、近接する生産基盤となる平野部との比高差が大きなものとして、木津城山遺跡(標高106m)を筆頭に、天神山・興戸・田辺の各遺跡が挙げられ、ともに50m以上と高い数値を示している。これに対して、北山・宮ノ背・南山・森山などの各遺跡は標高50mに満たない高度に立地している。ここに示される高度の差は、おおむね周囲への眺望の差を示しており、見張り・通報・对人的防塞などの諸機能の順応の度合いを意味している。とくに低高度に立地する後者は、かつて都出氏がBタイプ^(注20)、寺沢 薫氏が第2類型^(注21)として区分したものに相当し、「一般生産

活動・生活システムを基本的なところで逸脱しないもの」(寺沢)との解釈から、典型的(狭義の)な高地性集落に含めるのに否定的、消極的な見解が示されている。

第二に、遺跡の造営時期について考察を進める。これまでみてきた山城地域の広義の高地性集落の造営時期については、出土遺物から一部中期的要素をもつ土器資料が共伴する例もあるが、基本的には後期(V期)の枠の中で単純に経営されたものが大半を占める。さらに詳細に観察を加えると、木津城山・羽戸山・田辺・谷山の各遺跡のように、V期の前半に造営の中心が求められるものと、V期後半に至って始期を迎えるもの(北山・幣原・宮ノ背・備前・南山・天神山・飯岡・椿井・森山)に明確に区分することができる。このうち前者の古い一群は、その上限がIV期末からV期初頭に位置する点は注意してよい。つまり、この時期において、弥生土器の様式構造の同時代における最大の画期が見いだせ、櫛描施文や凹線文といった中期までの原始的土器生産体制を否定し、無文化・小型化を指向するといった土器様式が大きく転換する事実が近年強く意識されるようになった。その背景には石器から鉄器への生産様式・手段の移行にともなう新たな流通構造の成立が作用しているものとみられる。この弥生時代の集団関係の再編を伴う社会構造の変質期に、前期以来自然成長を遂げてきた安定型の集落構成・集団結合関係は一旦解体し、これらの拠点集落の近傍において、その衰退を伴う社会現象の中で、それを補完するように規模のひととき大きな高地性集落が出現する現象が畿内各地で認識できるようになってきた。こうした考え方を先導してきた森岡秀人氏は、ここにみる集落関係の変動パターンを類型化し、それが高地性集落の形態を採る場合に集住型と群棲型に区分することを提唱した。^(注22)同氏に従えば、木津城山遺跡はそのあり方から前者の類型、すなわち平地の拠点集落の分枝領域圏内に営まれた母集団の移村を前提とした規模の大きな高地性集落と意義づけることが妥当と思われる。いわば高槻市古曽部・芝谷遺跡、和泉市観音寺山遺跡、神戸市表山遺跡などを典型例とする高地性集落の類例として木津城山遺跡を加えたい。さらに、獣帯鏡破鏡や素文鏡といった大陸系、北部九州系の先進文物を逸早く入手している点、畿内におけるこの時期の通有の現象として高く評価すべきであろう。

一方、後期後半に経営された一群については、その始期が新年代観でいうA. D. 2世紀前半に位置することから、中国史書にみえる「倭国大乱」により直截的に結びつくことが、ここ数年の間に指摘されるにいたっている。京都盆地に展開する該期の高地性集落を概観すると、規模は小規模なものが多く、都出氏が指摘されたように、通報施設に力点が置かれた連絡機能型の性格が高い。おそらく鉄の供給ルートを巡る覇権争いに端を発する西方勢力(ツクシ政権)との争乱を背景とした社会的緊張関係が、その背景によりダイレクトに作用した結果、創出をみたものと理解すべきであろう。^(注23)

以上、近年発見された木津城山遺跡を中心に南山城地域の高地性集落について概観してきた。その結果、当地域の高地性集落には大きく二つの時期に分離できる経営の画期が見いだせることが明確となった。従来、この地域の高地性集落の多くは、一元的に2世紀の動乱に絡めて弥生後期(V期)後半に活動期に入るものとみられていただけに、後期初頭に出現するものが明らかに存在する意義は大きいものとみられる。中でも木津城山遺跡のような母集団の移村をも考慮すべき規模の大きな高地性集落がここ数年来の調査で明らかになったことで、この地域にも既述したような大きな抗争を伴わないような社会構造の変質を背景に生み出された大規模高地性集落の出現の波が、このような動向の圏外で独自の動きを示す大和に隣接するにもかかわらず、確実に及んでいたことが判明した事実は注目すべきである。

(いが・たかひろ=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 木津城山遺跡については以下の概要報告がすでに刊行されている。

伊賀高弘・萩谷良太「3. 木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

伊賀高弘・萩谷良太「4. 木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

戸原和人・筒井崇史「4. 木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注2 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に」(『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会) 1974

注3 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』一近畿編Ⅱ— 木耳社) 1990

注4 都出比呂志「弥生時代」(『向日市史』上巻 向日市) 1983

注5 木村泰彦「右京第237次(7ANJNN地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1988

福永伸哉『長岡京市史』本文編 長岡京市役所 1996

注6 高橋美久二「4 八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要(5 幣原遺跡)」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1969 京都府教育委員会) 1969

石井清司「八幡市幣原遺跡出土の土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注7 長谷川 達・小山雅人・大槻真純「5. 羽戸山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注8 中井英策『興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報』田辺町教育委員会 1995

注9 石尾政信・杉本厚典「6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』

- 第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注10 榊井豊成・竹中友里代『大阪工業大学構内遺跡発掘調査概報』(八幡市教育委員会) 1992
辻本和美・黒坪一樹・河野一隆「4. 一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注11 前掲注10文献
- 注12 榊井豊成『南山遺跡発掘調査概報』(八幡市教育委員会) 1987
榊井豊成「I 南山遺跡(第3次)発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第14集 八幡市教育委員会) 1994
- 注13 森 浩一編『同志社田辺校地 田辺天神山弥生遺跡』(同志社) 1976
- 注14 鷹野一太郎『京都府田辺町飯岡遺跡第5次発掘調査概報—無線基地局建設地の調査』(田辺町埋蔵文化財調査報告書)第17集 田辺町教育委員会) 1994
- 注15 近藤義郎編『京都府山城町椿井大塚山古墳』(山城町教育委員会) 1986
- 注16 小泉裕司・岡田憲一『城陽市埋蔵文化財調査報告書—森山遺跡発掘調査報告書—』第32集(城陽市教育委員会) 1997
- 注17 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』(岩波書店) 1989
- 注18 前掲注17文献
- 注19 京都大学人文科学研究所岡村秀典氏のご教示による。
- 注20 前掲注2文献
- 注21 寺沢 薫「大和の高地性集落」(『青陵』36 奈良県立橿原考古学研究所) 1978
- 注22 森岡秀人「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」(『考古学研究』第43巻第3号 考古学研究会) 1996
同「高地性集落研究の現状と課題—保存と活用を含めて—」(『明日への文化財』第41号 文化財保存全国協議会) 1998
同「高地性集落が語る列島の動乱—倭国大乱と鉄のルート—」(『別冊歴史読本 最前線シリーズ<日本古代史〔争乱〕の最前線>』新人物往来社) 1998
同「年代論と邪馬台国論争」(『古代史の論点④権力と国家と戦争』小学館)1998
同「弥生集落研究の新動向(I)—小特集「瀬戸内東部地域に寄せて」—」(『みずほ』第30号 大和弥生文化の会) 1999
同「弥生集落研究の新動向(Ⅲ)—小特集「淀川流域における集落の様相に寄せて」—」(『みずほ』第32号 大和弥生文化の会) 2000
- 注23 山尾幸久「東アジア史の中の弥生時代」(『ヒストリア』第152号 大阪歴史学会) 1996